

「S」の字の島、佐渡

工藤 泰子 (くどう たいこ / 一般財団法人日本気象協会)

「♪幸せって、何だっけ、何だっけ…♪」
というCMソングが昔流行ったのを、覚えていらっしゃる方は、私と同じ世代かと思います。日常のさりげないちょっとしたところに幸せはあるんだよというアピールです。

通勤で家から駅に向かう途中、いつも田んぼの脇を通ります。田植えが終わった田んぼはいろんな生き物がやってきてとてもにぎやか。カエルやアオサギ、シオカラトンボにアメンボ。そしてカモも常連。親子のカモが稲の間で窮屈そうに泳いでいるのを見る時、カモが生きているのと同じ空間に自分も生きることが何ともうれしく、「幸せだな〜」って思います。この空間の共有感。きっと佐渡の人々が、トキが飛んでいる姿を追うときも、こんな「幸せ」はひとしおなのではないかと勝手に想像しています。同じ空間にいるという安心感のような連帯感のような、そんな感覚を皆さんは持ったことがあるでしょうか。

かつて日本のどこにでも普通にいたというトキ。日本のトキの最後の1羽となったキンが亡くなった時のニュースは、まだ幼かった私の脳裏に強く焼き付いています。ぼんやり生きていた私ですが、その時本当に悲しかったのだと思います。人間はいまだに多くのかげがえのないものたちを失い続けていますが、そんな今の世の中で、一度は失われたトキと同じ空間にいられたことは、感動以外の何物でもありませんでした。

トキは手付かずの自然の中ではなく人の暮らしが営まれる里山・里地で暮らす鳥。そのトキが国内で最後まで残ったのが佐渡で、ト

キをよみがえらせたのも佐渡。人為的な影響を受けやすい場所で生きざるを得ない鳥が最後まで生き残り、そして復活した島。佐渡には人とトキが共生できるどんな秘密があるのだろう、そんな思いを抱いて上陸した佐渡でした。2泊3日の滞在で、やがてその理由は言葉ではなく、何となく五感で分かったような気がします。

本当は、最後までトキが残った理由は理屈でちゃんと説明できるのかもしれませんが、でも、ここは景色がやさしい。懐かしい感じ。ここにいていいんだと思える空気。そんな理屈でない要素もこの共生の地を守ってきたのではないかと思うのです。人間は自然に対してダメージを与えるけれども、一方で自然を守ることができるのも人間。佐渡で出会った皆さんは、それぞれの思いを持って活動に取り組んでいて、みんな違っているけれど、共通しているのは佐渡が大好きなこと。だから、佐渡の景色がやさしくなるのかもしれませんが。

私のお気に入り「S」のつくキーワードたちは、とても佐渡にあてはまると思うのです。人々のくらしは、Simpleであり、Softであり、Slowであり、Smallであり、だからこそSustainableで、そして様々な分野でSophisticatedな人たちが島を愛するSympathyでつながりあって、それぞれの個性を活かしてSymphonyを奏でているような…。

そして、この島Sadoは何より名前に「S」がつき、島の形も「S」の字に似ていると言われます。「ありふれて共にあること」が大切にされる島。佐渡では金のようにSiawaseをたくさん発掘できそうです。

広がりつつある活動を実感

澤地 實 (さわち みのる / (株)エックス都市研究所 特別技術顧問)

エコツアーは9名の参加者と出迎えのツアー企画者の十文字修さん、佐渡生きもの語り研究所理事長の仲川純子さんとの両津港での出会いから始まった。今回のテーマはトキと加茂湖であり、早速トキ視察に向かった。

かつてトキは日本国中で見られたそうだが明治以降乱獲で激減、一旦は絶滅状態となった。1952年に特別天然記念物に指定。まず行政が保護に取り組み、その後住民の協力で野生への放鳥が定着した。現在は飼育が201羽、野生が208羽となり、2020年の野生定着目標220羽がほぼ前倒しで達成できている。

トキの保護活動は、トキをシンボル・バードとしたトキとの様々な共生へ、さらには生物多様性を目指す活動へと発展している。

例えばトキの餌場となる水田での「生きものを育む農法」の実践で、田に隣接してビオトープや生きものの逃げ場となる江(深み)を設置する等の取り組みがあり、その成果が「朱鷺と暮らす郷」という認証米となっている。

こうした取り組みが評価され、2011年にはFAOの世界農業遺産(GIAHS)にも認定され、以降その内実の構築が課題となった。そして今や「心の豊かさ」に至る農のありようの追求へと展望が広がっている。

一方、里山や田んぼを中心とした環境学習や生きものと共生する島づくりを目指す、佐渡生きもの語り研究所の活動が子供達も巻き込んで賑やかな活動に発展している。

新潟県下最大の湖で汽水湖となっている加茂湖でも様々な活動が進展している。カキの養殖が盛んで、冬期には筏が400~500台に及

ぶという。市街地域に隣接、水田の下流という条件から富栄養化が進み、これに漁業者、農業者、学識者、住民が連携して取り組んでいる。浄化機能の無い矢板護岸に対し、ヨシ原による自然護岸の再生に取り組み、維持のため刈り取ったヨシで船を作るなどで運動を盛り上げている。子供達に大人気のようだ。

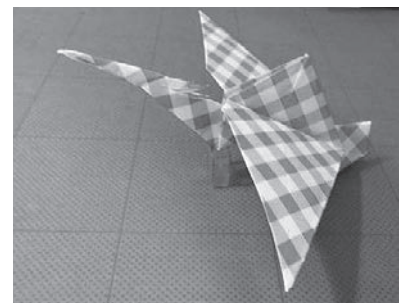
短時間の現地視察だったが、熱心な受け入れ対応のおかげで充実したツアーとなり、深く感謝したい。個々の先覚者の点の取り組みがつながり線となり、さらに面としてジワリと活動が広がりつつあるのを実感できた。また幸運にもたまたま二日目の水田での調査作業中、トキが空を舞っているのを何回か観察できた。様々な島民の協力の下、トキの繁殖がさらに進み、ふと見上げるとトキがいる、というような濃密な共生状態も遠くなさそうだ。

佐渡は自然豊かで、海産物、農産物も豊富、さらに全国の3分の1も能舞台があるという伝統郷土文化も根付いている。

高齢化が進んではいるが、Iターン組の蕎麦屋、カフェ等への動きもあり、皆それぞれの佐渡風の暮らしを目指して頑張っている。

一面に広がる水田の緑が眩しく、トキとも出会え、佐渡風のエコを満喫できた。

個人的には牡蠣試食と大佐渡山地縦走が来年5月の連休後の再訪予定時に残したテーマだ。



飛翔する折トキ

再会の島に

十文字 修 (じゅうもんじ おさむ／新潟県佐渡市在住)

来訪者を港に出迎えるのは、島ぐらしでの楽しみの一つだ。紺碧の海の彼方から近づく船をながめながら、再会や新たな出逢いをそわそわしながら待つ。それは幸せなひとときである。今回は旧知の加藤さん、藤村さんをはじめ9名の皆さんを、そうやってお迎えすることができた。

佐渡は広い。かつて太宰治が訪れた際、ちかづく島影を満州と錯覚したほどである。横浜市の2倍の面積があり、金山やたらい船、日本海交易華やかな往時そのままの家並みなど、自然と歴史の見どころにあふれている。ゆえにともしれば、急ぎ足で表面をなでて終わることになる。それが佐渡観光の贅沢な悩みでもある。そこで、テーマを「環境」に絞ったこのたびのツアーではあったが、さらにつぎの2つを軸にした。ひとつはトキ、もうひとつは牡蠣。

トキは言うまでもなく佐渡のシンボルである。一時期、野生のトキは絶えたものの、10年前からの放鳥で、現在はこの島の空に200羽余が舞う。その野生復帰の取り組みの現地を訪ねた。案内人は、トキ放鳥開始以前からの市民サイドの牽引役である、佐渡生きもの語り研究所・仲川純子さんだ。またトキを支え、トキを生業に活かす環境保全型農業の田んぼでは、佐渡農業のリーダー齋藤真一郎さんに解説をお願いした。

もう一方のテーマは加茂湖の牡蠣業の再生である。佐渡の加茂湖は新潟県内最大の湖で、

この汽水湖では牡蠣の養殖が伝統的に盛んだ。産業や景観はもとより、水質保全上も大事な役割を持つ牡蠣養殖は、しかし近年深刻な後継者不足に見舞われている。そこで佐渡島加茂湖水系再生研究所・豊田光世さん、若き牡蠣漁師・伊藤剛さんに今後の展望を伺った。ヨシ原再生や漁協による人材養成研修所の開設などの取り組みが始まっている。

2日目の晩には上記をはじめ、島内の環境をめぐる実践者に集まっていたいただき、ツアー参加者との交流会をもった。島の内と外の対話はもとより、島民同士の顔合わせが分野をこえてなされたのは、今後につながる手応えを感じさせる光景だった。外からの来訪は、内にこういう効果を生む。

やはり盛沢山過ぎたかな、と気になるスケジュールだったが、最終日、両津港での振り返り会では皆さんに好評をいただいた。その感想の詳細は、別稿にて本誌に寄せられるとうかがっている。私自身は、このツアーの意義はこれを起点とし、今後何が行われるかにかかっていると考える。いちど喪いかけたものを、この島で再び取り戻すために。2日目の午後、一羽のトキが一直線に私たちの頭上に飛来し旋回してくれたことを、そのささやかな予兆としたい。

今後につなげる具体的提案を持って、実はツアー終了10日後に、私は加藤さん、藤村さんとあらためて面談させていただいた。皆さん、また佐渡でお会いしましょう。